有田ダム

昭和36年に完成した有田ダムは、春を迎えるとソメイヨシノが花を開き、花見の名所となっています。ダムができる前は、会社や料亭の東屋が建ち並び、休息の場として人々は奥まった自然を楽しんだそうです。

またこのあたりは、黒髪山の大蛇退治の伝説にも登場します。黒髪山に住み、天童岩を七巻き半もするほどの大蛇が、日々ふもとに下りてきては畑を荒らし、村人たちを苦しめていました。そこで大蛇を恐れていた村人たちは、弓の名人であった鎮西八郎為朝（源為朝）に大蛇退治を頼みました。相談の結果、万寿姫をおとりに大蛇をおびきだし、酒を飲ませ、酔った大蛇を為朝が弓矢で射ることになりました。計画は成功し、大蛇は退治されました。

大蛇退治のための相談が、このダムの湖底で行われたと伝えられ、評定場と呼ばれています。黒髪山の大蛇退治の話は、このほかに大樽、中樽、小樽、戸矢など町内の地名起源説話となっています。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No. 20

富村勘右衛門と嬉野次郎左衛門

有田磁器の海外への輸出をみると、最も早い時期のこととして、正保４年（1647）に初代柿右衛門が長崎で色絵磁器を売ったという記録があらわれます。続いて、承応２年（1653）には、オランダ連合東インド会社（略称　ＶＯＣ）による有田磁器の輸出が始まり、大量の製品が海外に出ました。しかし、このＶＯＣによる輸出は徐々に衰退を見せはじめ宝暦７年（1757）の注文を最後に、寛政11年（1799）には解散し姿を消しました。ＶＯＣによる貿易は佐賀藩との間で行われた公貿易でした。しかし、享保年間（1716～1735）には密かに私貿易が行われ問題がおきています。それが今回ご紹介する富村勘右衛門、嬉野次郎左衛門の印度方面への磁器輸出の話です。

富村勘右衛門は有田の豪商で大樽に家があり、嬉野次郎左衛門はそこで番頭を勤めていた嬉野与右衛門の養子で、実家は赤絵町にありました。富村家は薩摩の出身で、薩摩では巨船を５，６艘所有し琉球通いを名目に印度方面に通商を行い富を築いていました。しかし、諸事情から伊万里に移り住むことになり、そこでも以前のように雑貨を仕入れて印度貿易を継続していました。そのうち貿易の重要品であった磁器との関係から有田に住居を移したそうです。

富村家４代目を継いだ勘右衛門の時代には、鎖国令が出されていたため印度はもちろんのこと外国との通商は厳禁されていました。当時富村家は、味噌庫にさえ判金が沸返るといわれるほどの繁栄ぶりでした。しかし、勘右衛門はかつて隆盛を極めた先祖の偉業を思うにつけ、印度との貿易を再開したいと強く願いました。そして、勘右衛門と意気投合した次郎左衛門は、幕府の禁制を犯して有田磁器の密輸を企てたのです。

勘右衛門は伊万里の港で船に荷物を積み込ませ、それからいったん平戸へ停泊し、そこで次郎左衛門が一切の準備を整え、同地の今津屋七郎右衛門を伴って印度へ赴きました。印度からの帰りには、かの地の珍器を積み込み、内地で販売し巨利を得たといわれます。

しかし、その後次郎左衛門が大坂で販売した品物から足がつき、七郎右衛門、船頭まで捕らえられました。次郎左衛門は獄舎で拷問を受けながらも、勘右衛門がこの事件に関知せず、次郎左衛門ひとりの所存で行ったことと主張しました。これを知った勘右衛門は、科を免れることはできないと悟り、大樽の自宅で自害しました。そして勘右衛門の自害を知った次郎左衛門は罪を認め、他の者と刑につき、長崎で刑をうけました。

皿山の風物

彼　岸

小溝の比丘尼さん

春分、秋分を中日として、前後３日ずつを併せた７日間を彼岸といいます。「彼岸」という言葉は、梵語の「波羅（Para）」の訳語とされています。太陽が真東からのぼり、真西に沈む春分と秋分の日に浄土を観想し、往生を願うという仏教の影響を受け、この期間は寺参りなどが行われています。

春の彼岸は、３月18日が彼岸の入りで24日がミテ（終日）となっています。この期間には寺参りをしたり、また、壇家の家にお坊さんがお経をあげに回ったりします。お経をあげてもらった家では、お坊さんの帰りに米などのお礼を持たせます。

小溝地区（南原）では、彼岸の中日にハナダゴという、コメンコ（米粉）でつくった団子を、地区で祭っている比丘尼（びくに）さんに供えます。小溝地区は12軒の隣保班から成り、３軒が１グループとなって持ち回りでハナダゴ作りを担当します。１軒から１合の米を抜き、20年程前までは、臼でひいて作っていたそうですが、今は精米所へ持っていってコメンコを作ります。できあがったハナダゴは、２個ずつ比丘尼さんと、合祀されているやきものの神様の高麗さんと、仏さんにも供えられます。そして、高麗さんには榊が、比丘尼さんと仏さんには花があげられます。残りのハナダゴは、隣保班が集まっていっしょに食べます。ハナダゴは花を形どっていることからこのように呼ばれ、これは砂糖をつけて食べられます。

また、清六地区では、この日に「願成就」という、男は下南川良山の天神さんに、女は三代橋の観音さんにお参りする行事が行われています。

海のシルクロード

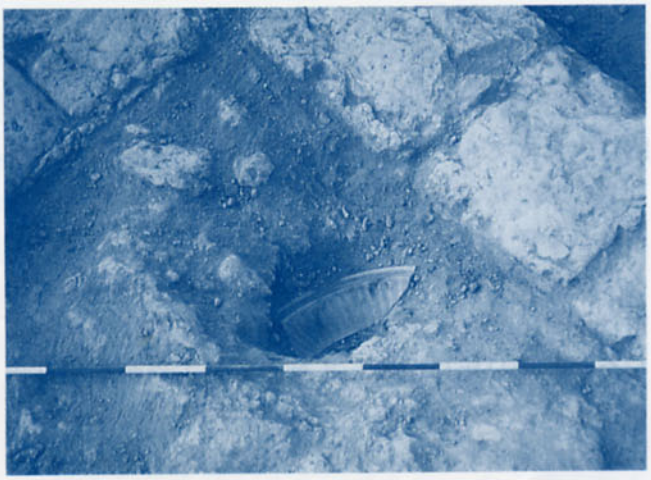
ジュルファル遺跡

シルクロードという言葉でまず思い浮かぶのは砂漠の海と駱駝（らくだ）の船でしょう。中央アジアの砂漠と草原と高峰の地帯、そしてまた幾世の時代をも貫いた東西交易路を「絹の道」と呼んでいます。

そして、その東西交易路は陸地だけでなく、海にもありました。有田焼が遠くヨーロッパまで運ばれたのも海の道でした。それは主にオランダ連合東インド会社によるものでしたが、ヨーロッパ人の大航海時代が始まるずっと以前からアラビア海、インド洋、東シナ海では海の道がつながっています。中国陶磁はその海の道を通じて西アジアなどにもたらされています。その海の道を「陶磁の道」とか「海のシルクロード」と呼んでいます。

さて、昨年12月から1月にかけて休暇をとり、ジュルファルという遺跡の発掘調査に参加しました。ジュルファル遺跡はペルシア湾の出入口であるホルムズ海峡の付近にある貿易都市の遺跡です。現在までイギリス隊、ドイツ隊が調査を行っており、5年前より日本隊（金沢大学佐々木達夫隊長）も調査を始めました。発掘調査箇所は14世紀～16世紀の遺跡のようで地元の土器やペルシア陶器にまじって中国青磁、中国染付、タイ青磁などが出土しています。有田焼の海外輸出が始まるのが17世紀中ごろですから、今回の調査箇所からは有田焼は出土しませんでしたが、遺跡の付近では有田焼の色絵片や清朝磁器の出土が報告されており、遠く海を越えてもたらされているのは確かなようです。

△海から見たジュルファル遺跡



△出土した中国青磁

ここで西アジアと有田の関係について少し触れておきましょう。オランダ東インド会社の文献によれば1659年に有田は大量注文を受けますが、その送り先にアラビア半島の紅海沿岸のモカという港町があり，21,567個の磁器が注文されています。それ以降もインドのスラットからアラビアのモカやバスラ、ペルシアのガムロンに転送されています。西アジアにおいてどのように使われていたのかはわかりませんが、相当量の有田焼が西アジアに運ばれていることは確かです。東南アジアやヨーロッパへもたらされた有田焼の研究は行われていますが、西アジアや南アジア、特にアラビア半島については今なお空白のままです。今後の大きな課題だと思います。

道　標

「くろむた・ひろせ道」の文字が読める

有田町から西有田に抜ける有田～大木線の道ぞいに石柱が立っています。これは明治19年に立てられた道標です。道標は旅人の道案内として町境や三叉路などに立てられました。今でいう交通標識ですが、これを頼りに、目的地へ向かった人たちがたくさんいたことでしょう。

この道標を立てたのは松尾良吉という人です。良吉は安政４年（1857）伊万里の裕福な家に生まれました。明治11年に分家して有田町で古着商を営み、有田銀行設立の際にも尽力し、有田町議会議員なども勤めています。後に本拠地を佐世保に移し、佐世保、東京を中心に活躍しました。

明治19年、良吉は佐賀・長崎両県下に旅人のために「しるべ石」の建設に着手しました。東京での丁稚奉公時代に複雑な迷路に苦しんだ思いからこの計画を思いたったといわれています。「金は私が支払うから必要と思われる所に何百本でも立てて貰いたい」と、杵島郡住吉村（山内町）の石工・神吉佐市に依頼し、まず有田町を中心に西松浦、杵島、藤津の各郡から着手しました。そして、佐世保市、東彼杵、北松浦のあたりまで拡大して立てられました。

いったい何本の道標が立てられたのか、その数はつかめていませんが、数十年をかけて立てられているだけに相当の数に達していると思われます。今ではつい見逃してしまいそうな石柱ですが、良吉のあたたかな思いやりが、ほのぼのと伝わってきます。

街角の歴史

お知らせ　古文書教室

来年度の古文書教室の受講生を募集しています。月に一回、古い記録の解読にチャレンジしてみませんか。今とは違う制度や生活が見え隠れして、先人たちの息づかいが聞こえてきます。講師の先生が社会背景を交えながら丁寧に教えてくださいますので、興味のある方はぜひお申し込み下さい。申し込みは資料館で受け付けています。

・講　　師　前山　博先生（前九州陶磁文化館副館長）
・日　　時　毎月第２水曜日
　（中級）13時～15時
　（初級）19時～21時
・テキスト　（中級）酒井田柿右衛門家文書
　（初級）御手頭写（佐賀藩の法令を書いたもの）
・場　　所　（中級）生涯学習センター3F　学習室
　（初級）勤労者福祉会館3F　Ａ会議室

白川の細流

12月に行った民俗調査では、町内の皆さんにご協力をいただきありがとうございました。今月５日から９日まで、今年度２回目の調査を行います。またお世話になります。

弥生の声を聞くと、寒い中にも春の息吹が感じられ、昨日までとは違う感慨を覚えます。まもなく梅に続いて桜が花を開き始めるでしょう。資料館も花に囲まれます。ぜひお立ち寄りください。

（萬）

皿山びとの歌
有田町歴史民俗資料館報　No.20
発行年月日 ＊ 平成５年３月１日
編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955－43－2678